

第1回杏林医学会研究助成金 部門C 研究報告

川口 明日香

杏林大学医学部小児科学教室

研究課題名：病院に勤務しアレルギー疾患に興味のある多職種の職員を対象として内部・外部講師を招く勉強会を開催し、アレルギー疾患や関連領域に関する知識・理解を深める

指導対象者：杏林大学医学部附属病院看護部看護師，薬剤部薬剤師

申請者：杏林大学医学部小児科学教室 川口明日香

【研究の趣旨】

本邦では、高度経済成長期の頃から小児のアレルギー疾患は増加傾向である。年代によって患者数の多いアレルギー疾患は変遷しているが、アレルギー疾患に悩む小児は減ることがないというのが現状である。アレルギー疾患は主にアトピー性皮膚炎，食物アレルギー，気管支喘息，アレルギー性鼻炎であるが，これらの疾患は1人の患者の中で立て続けに発症することがしばしばみられ，マーチのように進行していく様に似ていることから「アレルギーマーチ」と称されている。近年，アレルギーマーチの進行を止めることが可能かという研究がアレルギー領域では盛んであるが，実際に止められるところにはまだ至っておらず，多方面からのアレルギー疾患の管理が求められる。限られた診療時間内で医師が複数の疾患の指導を行うことは難しく，小児アレルギーエデュケーター（Pediatric allergy educator：PAE）やアレルギー疾患療養指導士（Clinical allergy instructors：CAI）の資格を持つコメディカルの協力により，診療を充実させることが可能である。これらの資格は取得するのに費用・時間・労力を要するため，取得者がまだまだ少ないのが現状である。そのため，我々は第1回杏林医学会研究助成金をPAEやCAIの育成に用いることとした。

【目的】

PAEやCAIに興味を持ってもらい，資格取得希望者を

増やす。

【方法】

コメディカル向けの講演会を行い，資格取得希望者がいる場合には講習会受講や資格試験にかかる費用を一部負担することとした。講演会は，PAE設立に関わった益子育代先生に講演を依頼し，院内の小児に関わる医療従事者を対象に開催した。講演会出席者は終了後にアンケートに回答した。

【結果】

2024年3月8日に杏林大学三鷹キャンパス大学院講堂にて講演会を開催した。治療へのアドヒアランスを高めるためには，行動分析学を応用した関わりを行うことが有用であることを症例を交えてご講演いただいた。講演会終了後に行ったアンケートは，以下のような結果であった。参加者は24名であり，職種は看護師12名（50%），医師7名（29%）が多くを占めたが，助産師や薬剤師，理学療法士，医療ソーシャルワーカーの参加もあった（図1）。経験年数は15年以上が48%と多くを占め，次いで0年以上5年未満が26%，5年以上10年未満と10年以上15年未満がそれぞれ13%であった。参加動機は「ポスターなどのイン

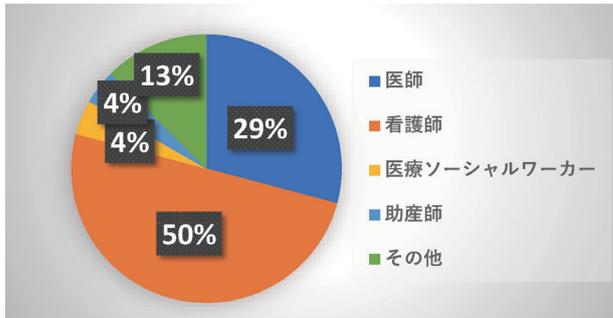


図1 参加者の職種

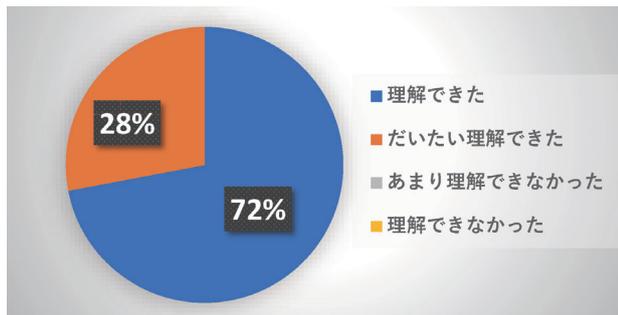


図2 講演内容の理解

フォーメーションを見て」が6名、「普段から患者指導に携わっているため」、「テーマに興味があった」がそれぞれ4名、「小児と接する機会が多いため」が3名、「子どもへの良い関わりをしたい」が2名、無記載4名であった。講演内容を「理解できた」のは18名(72%)、「だいたい理解できた」は7名(28%)であり、「あまり理解できなかった」、「理解できなかった」はそれぞれ0%であった(図2)。今後に活かそうかという問いには「患者教育のポイントを聞いたことがよかった」、「治療を主体的に続けられるような具体的な関わり方がわかった」、「患者の困りごとを知り、それを解決しようとする思いで関わるのが大切」、「行動分析学を学んでみたいと思った」、「普段の子どもへの関わりや、家族への介入にも生かせる」などの回答があった。

講演会の開催時期が予定よりも遅れ、PAEやCAI資格取得の申請期限に間に合わなかったことから、今年度の資格取得希望者は0名であった。

【考察】

アレルギーマーチにより、一人の患者に複数のアレルギー疾患が併存していることが多いことから、普段の小児アレルギー診療で患者への指導内容も多くなっている。限られた診療時間で多くの情報を伝えることは難しく、情報の取捨選択を迫られることもしばしばみられる。益子ら¹⁾は、掻痒と掻破行動のオペラント条件付けについて述べており、皮膚を掻くという行動は親の注意を子どもに向けさせ、親の関心を子どもに引き付けるという報酬が得られることにより、掻破行動が強化されるとしている。このように、掻破行動ひとつにしても引き出すべき情報は膨大である。舟木ら²⁾は、外来で看護師が行っているアトピー性皮膚炎患児に対するスキンケア指導の効果について有効性があると述べており、さらに年齢や重症度に応じた介入継続の必要性についても論じていた。個々の患者の問題点を引き出し、それに対応した診療や指導を行うために、PAEやCAIのスキルは重要であると考えられる。今後もコミニカルに情報提供を行い、まずは資格に興味を持ってもらうところから活動を継続したい。

【参考文献】

- 1) 益子育代. 心身医学 (0385-0307) 42巻3号 Page187-195 (2002.03)
- 2) 舟木由乙世. 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会誌 (1348-1215) 10巻3号 Page293-298 (2012.09)